

# 自動車の世紀がもたらしたものの

自動車誕生から百年。  
20世紀はまさに「自動車の世紀」であった。



文  
**徳大寺有恒**  
Text by Aritsune Tokudaiji

自動車がいっつ完成したかは諸説があり特定できないが、一般的には内燃機関の完成を見た一八八六年とされている。ドイツのゴットフリート・ダイムラーとカール・ベンツの二人が各々異なる場所で内燃機関を動かしたのである。

以後、約百年と少し、二十世紀を代表する産業、文化として自動車は世界中に普及した。現在、世界中に六億台以上存在すると考えられ、一年間に生産される数は四千万台とい

自動車もたらした最も大きな仕事は工業化ということだと思ふ。H・フォードはこの成功を、流れ作業による大量生産で実現した。これが労働者階級を大量に創出し、労働者と資本側との対立を生み、また都市に労働者を集中させ、やがて工業労働者以外の給与生活者（サラリーマン）を生み、このことはハウスイフを確立し、現在の一般的な生活システムを生むことになる。

フォードによる自動車の大量生産は二十世紀の大量生産、大量消費を作っていく。そして学問としての産業論や文化体系を生んでいくのである。

一方、商品としての自動車は人間により強く「個」を意識させ、民主主義を押し上げる源動力となる。自動車は人々に移動の自由を与えると同時に、もつと大きな意味での自由を与えたのである。

現在でも自動車工業に参入する国家は少なくないが、これらの国はより民主化を推進することになる。

十九世紀に最初に考案される動力は蒸気機関であり、これを利用して蒸気機関車による交通の近代化が行なわれる。

本来、この蒸気機関にヒントを得たと思われる内燃機関は、よりシステムが小型であり、交通機関には向いていると考えられた。この発明家が二人ともそろって自動車を考えた

ことはけっして偶然ではない。

かくしてゴットリーブ・ダイムラーとカール・ベンツは二人とも自動車製造業者となり、ビジネスを開始する。そしてこの二人の自動車開発者は終生違ふことはなかったと言われているが、彼らの死後、前記の二つの自動車会社は合併し、現在でも活躍中のダイムラー・ベンツ（現在はダイムラー・クライスラー）となるのである。

自動車はまずアメリカ（USA）に発展した。一九〇九年、第二十七代大統領に就任したウィリアム・ハワード・タフトは、自動車を乗りまわした初めての大統領である。

第一次大戦と大不況を体験するロリングトゥエンティ時代、自動車はアメリカ人の足として爆発的に広がる。

自動車工業はアメリカ最大の産業となり、一九二〇年から一九二九年までの間には数多くの自動車会社が登場し、同時に消えていったのである。しかし、アメリカの自動車生産は一九二〇年には一九〇万台に達していた。

この時代、アメリカ人が楽しみとしていたのは、自動車を使ったピクニックであり、このピクニックを題材とした多くの物語やアートが生まれている。一九二〇年代のアメリカでは九百万人が自動車を運転していた。これは驚くべき数字で、自動車は社会を大きく変化させていった。



Car of The Century ホームページ  
20世紀を代表する「1台」を世界のジャーナリストや一般人の投票で選ぶ壮大なプロジェクト「カー・オブ・ザ・センチュリー」の結果が、99年12月中旬ついに発表される。T型フォードをはじめ、26台まで絞り込まれた最終候補には、残念ながら日本車は1台も入らなかった。http://www.cotc.com/

全米で一万九千軒のガソリンスタンドが営業し、そこから数々のビジネスが生まれていった。

ドラッグストアからやがてスーパーマーケットが登場するまで、ガソリンスタンドは人々の集まる場所となった。

当然、道路も整備されなければならず、一九二〇年代は政府予算として七五〇〇万ドルが計上された。この時代アメリカのハイウェイに番号がつけられた。

今日でいうところの自動車社会は、この時代のアメリカで作られたといつていい。それは最大の工業製品であり、商品であり、文化となったのだ。

多くのメーカーが競争するアメリカではマーケティングの学問が重要となり、新しい職業が生まれた。

派手なカタログはイラストレーションで飾られ、クルマも低く、かっこよく見せる技術が珍重された。この宣伝という点ではヨーロッパのメーカー、シトロエンがパリのエッフェル塔にCIATROENという文字を電球で飾ったのである。映画「翼よあれがパリの灯だ」で使われたこのシトロエンの広告作戦は時代的にもぴったり合つた。

自動車工業はかくて百年を迎えたが、このA地からB地へ人または物を運ぶ、便利な道具は二十世紀の人々の憧れであり、生活であった。現在、自動車工業は排気ガス、交



1999年11月、総合開催としては今世紀最後の東京モーターショーが幕張メッセで開かれた。各社ミレニアム・コンセプトの注目のニューモデルを出展した。

とくだいじ・ありつね 自動車評論家  
1939年生まれ。トヨタのワークスドライバーとして活躍のち、自動車評論家に。95年、徳大寺自動車文化研究所を設立。マスコミ、自動車業界などで幅広く活躍。著書『間違いだらけのクルマ選び』は毎年新シリーズが刊行され続けている超人気ベストセラー